

実践政策学のためのエピソード記述の方法序論

森栗 茂一 (大阪大学 CO デザインセンター, morikuri@cscd.osaka-u.ac.jp)

An introduction of method of episode description for practical policy studies
Shigekazu Morikuri (CO-design center, Osaka University)

要約

本論は地域研究、実践政策学のエピソード記述の方法について、仮説を提出することを目的とする。本論では、水俣病被害者のリアルな記述資料を使い、次のような記述表現・分析記述をした。①エピソード、地理的背景・歴史的背景・民俗的背景、考察に切り分けて記述した。②考察には、分析者の反省や発見(態度変容)を記述した。③命、生活、持続に焦点をあてて考察した。④読者の納得(読者の態度変容)が期待されるような考察をした。その結果、地域での漂白漁民差別が水俣病救済を遅らせたこと、近代工場の登場による地域分断が水俣病の遠因であったことを、明示することができた。これは、地域研究、実践政策学における質的研究の方法となりえる。

キーワード

物語, 定性的研究, 水俣病, 内省, コミュニケーション

1. はじめに

1.1 本論の目的

社会の事柄を究明するには、事実として「社会(のモノ)とは何か」を問う自然科学と、「社会の本質(コトの意味・構造)とは何か」(括弧内、筆者補足。以下同様)を問う人間科学とがある(竹田, 2015, pp.45-46)。実践政策学はモノとコトの複合体である社会の物事を取り扱う⁽¹⁾。

しかし、現状の学術世界では、複合体である社会の一部分を切り出し、エヴィデンスベースドの量的分析・研究が主流である。複合体は複合のままにし、全体からその構造をとらえようとする物語研究などの質的研究に対して、「実証的でない」「科学的でない」という批判が強くなる(竹田, 2015, p.2)。しかし、専門分野だけで発言し、専門分野だけで決断する者ばかりでは(共産主義国家のテクノクラートの寡頭制のごとく)民主主義が成り立たない。(臨床や生活の現場では量的分析・研究による)専門知をつなぐ「物語」が必要だ(辻, 2016)。専門知を参考にしながら、全体を見渡し談義し統合する「物語」が求められる。

質的研究は単なる理論的な場所ではなく、現場にいる人びとにとって有効、必需であり、ここに質的研究の優位性がある(竹田, 2015, p.2)。研究者側の量的分析・実証視点だけではなく、実際の現場にいる人びと(生活者の当事者性)とのコミュニケーション、どのような了解が読み手に生まれるかという効果(鯨岡, 2015, p.224)、可能性を含めて、質的研究は社会臨床研究のひとつである実践政策学には重要な視点である。

ところが、これまでのナラティブ論、社会構成主義の研究は、(研究者コミュニティ、政策現場、さらには生活者との)共通理解を作る原理(方法)を持たない弱点があった(西, 2015, プロローグ p.v)。

本論は、実践政策学・地域分析におけるエヴィデンス

を仮説し、共通理解を得られるエピソードの構造発見、分析方法、記述法を試み検証する。この仮説検証により、近代客観主義の基礎となったデカルトが提示した「普遍的な認識」(デカルト, 1997)にとらわれない、実践政策学のための共通理解の第一歩を提示することを目的とする。

1.2 大きな知識だけでは語れない時代

包括的な知識とか統計的に集計された(近代の)大きな知識(による市場経済システム)が右肩あがりの経済をつくった時代には、一定条件を所与とした数値的客観によって効率性を評価できた。リスクさえも計算して、リスク回避できた。環境問題をはじめとした「成長の限界」(メドウズ, 1972)が見えても、これを外部経済として計算し市場経済がおこす失敗を最小化した。『選択の自由』(フリードマン, 1983)があったと思えた時代があった。

しかし、20世紀末以降、右肩下がりの経済のなかで予想もしないことが起きる「不確実性の時代」では、不確実性を予測し計算することが難しい。こうしたなか現代の市場経済は複雑骨折し、国家の失敗を避けたい小さな政府論と市場経済の失敗を穴埋めする福祉国家論との間で右往左往している(金子他, 1998, pp.8-12)。

こうした不確実性の時代、市場経済システムや強制力による執行に裏打ちされた強い意思決定システムは限界にきている。それよりも、自由な意思が関係強化(信頼)を求め、間世界⁽²⁾をひろげる「弱さを内包するフラジャイルな(弱さ)システム」(ボランタリー経済)が必要なのだ(金子他, 1998, pp.36-40)⁽³⁾。

不確実性に対するひとつひとつの現場対処や分散的にもっている小さな知識は、(不確実ではあるが)連携による信頼でつながり、(社会政策に)意味を持つ(金子他, 1998, pp.77-74)。山納は、社会のさまざまな場面に従事している個々人が、それぞれ不完全なままに、お互いに矛盾するものとして分散的にもっている小さな知識に注目し、そのつながりやコミュニケーションの場としてカフェ

(的対話)を位置づけた(山納, 2016, p.172)。

カフェ(的対話)以外にも、地域づくりやまちづくりなどでは、つながりやコミュニケーションはその個別的分散的知識の相互編集であり、そのエピソード記述と知識化、実践活用が求められる。ここに本論の今日的意義がある。

2. 構造と公共

2.1 「客観性」の限界

西は学問の客観性とは客観世界との一致ではなく、共通理解(確かにそうだと思うこと)をどうつくるかということ(西, 2015, プロローグ p.iv)だと、「客観性」を客観している。

フッサールは『現象学の理念』で「認識の謎」によって客観を否定している(竹田, 2012)。デカルトの実証主義の主客一致は、つまるところ主観の認識である。この自分の認識は客観存在それ自身と参照することができず、その「正しさ」を確証できない。カントはこれを「物自体」の認識不可能性として示し「超越論」的問題として誰も突き崩せない難問とした(竹田, 2015, p.6)。客観的認識は、限定条件で思い描かれたものだから、後続する体験によって書き換えられる可能性をつねに持つ(西, 2015, p.130)。

実はデカルト自身も「客観性」とは言っていない。『精神指導の規則』規則第三に「示された対象について、他人の考えたところ或いはわれわれみずから臆測するところを、求むべきではなく、われわれが明晰かつ明白に直観し**または**確実に演繹しうることを、求むべきである」と述べる(デカルト, 1974, p.17 太字加筆)。デカルトは、一般には厳しく「客観性」を求めたと理解されるが、実際には直観(よく観ること)が第一であり、「**または**」演繹「しうる」を求めた⁽⁴⁾のである。

2.2 竹田青嗣の「本質(構造)⁽⁵⁾ 観取」論

竹田は以下のように述べる。フッサールは「主観-客観」構図を廃棄して「内在-超越」を主張し、一切の認識を主観の「確信-信憑」と考えた。フッサールは、他者の感覚に超越し「確かにそうだ」の納得することこそがエヴィデンスと考え(竹田, 2015, p.12)、以下の本質(構造)観取の手順を示している。

- 客観(対象)が存在する、という暗黙の前提をいったんなしにする(エポケー=判断中止)
- するとすべての認識は、何ものかが存在するという確信(存在確認)とみなされる
- この存在確信が、どのような条件で主観(意識)のうちで構成されるのかについての、共通の構造と条件を取り出す(観取する)

という作業となる(竹田, 2015, p.20)⁽⁶⁾。

ここでいう本質(構造)観取とは、コトを「単純に知る」だけではなく、観察対象者の心の動きを感じ取り、同時

に対応する自分の心の動きを感じながら対象者に関わり、対象者の力動感が自分の中にも立ち上がり、気づき(自己了解)が促進される(西, 2015, プロローグ p.vi)というメタ認知である。日本語では「腑に落ちる」「納得」と表現され、気づきが促進され発見があれば「目から鱗」と表現される(3.1 後述)。

こうして力動感をもって観取された構造は、人々の行動、実践を突き動かす。専門家の客観的な知識のみで解明できない場合、共通の構造と条件を取り出す方法は役立つものと思われる。

2.3 類型的構造(一次エヴィデンス)

しかし、竹田のいう(現象学的)本質とは、対象や経験を越えた個々の「思い込み」と誤解されやすい。『現象学辞典』では、本質性は類、種として表現される階層性を持つという(木田他編, 1994, pp.428-429)。

現象学の歴史においても本質(構造)直観については、誤解に対する反論や継続的な批判的考察がなされた(木田他編, 1994, p.429)。その結果、初期の現象学は「基礎づけ主義」「同一性の哲学」「本質主義」の色彩を持っていたが、最終的なフッサールの現象学は「反基礎づけ主義」「非同一性の哲学」「反本質主義」に変更された(木田他編, 1994, p.149)。

しかも『現象学辞典』には「本質観取」はない。本質直観(本質観取ともいう)(Wesensanschauung)を、感性的直観に依存しながらも、単にその個体を思念せず、それに対応する類的普遍性を意識する理念化的抽象である(フッサール『論理学研究』II/2 第2版, p.183)という。貫成人も「類型的受動的形成は経験においてつねに機能する本質直観」という(貫, 2003, p.215)。

竹田も人文科学の間主観において厳密な共通認識は成立しないが、共通構造を取り出すことはできるという(竹田, 2015, p.14)。

構造は「部分と全体との関係」という意味であり、この構造概念を発見し、記述的に分析したのはフッサールであった(木田他編, 1994, p.147)。

そこで本論では「本質」の用語を避け、類的構造を含めた共通「構造」を取り出すことが一次エヴィデンスであると定義する。

2.4 公共的一般性(二次エヴィデンス)

人間科学(やそれを含む実践政策学)が当面する、本質的問いに客観的答えを求めることは難しい(竹田, 2015, p.18)。これに対して、自分の体験からの認識は、「反省してみると自分の体験は確かにこのよう(な構造)になっている」と、確実性、不可疑性が伴う。これを体験反省的(一次)エヴィデンスという(西, 2015, p.130)。

人間科学を含む実践政策学ではどれほど客観的に記録しても、対象者の発言音声をどれほど大量に記述しても、客観性を持つことは難しい。記述しただけではエヴィデンスにならない⁽⁷⁾。これに対して、自分の体験、感覚と対象者との対話を、自分にひきもどして反省して考え、

その反省を言語化（記述）するならば、一定の正当性を持つ。正当性を持つ（対象者と観察者の）合意ならば、とり出せる（竹田, 2015, p.18）のである。

知覚されたものは私だけではなく、他者にとっても接近可能だ。知覚経験は私秘的ではなく、公共的であり、世界の客観性は諸自我の協働を前提とする（貫, 2003, p.171）。

本質（構造）観取における限定的一般性（山竹, 2015, p.77; 木下, 1999, p.81）より、読み手や観察対象者が共感し理解しやすい一般性とは「普遍性というよりは公共性」という意味での一般性（鯨岡, 2005, p.41）であり、これを人間科学における二次エヴィデンスと定義する。

類的構造や反省的記述による公正性や、公共価値に参照しうるエヴィデンスは、「客観的」事実を求める限定された「科学」とは異なる、人間科学を含む実践政策学のエヴィデンスになりうると、本論では仮説する。

3. 接面という方法

3.1 接面の方法と反省的エヴィデンス

社会的支援や臨床心理の自他関係においては、外部者（観察者）も内部者（対象者）も、またレポートを読む読み手も、「気づき」を育て共有するより、マニュアルをもとめる傾向がある。しかし相手の心の動きに気づき、同時に対応する自分の心の動きを感じながら相手に臨機応変に関わる「接面」という方法が重要である。接面は人により状況により異なり、あれやこれやと考える面倒な作業である。学術の主流派である定量のみを信じるエヴィデンスベースな研究者は、現場と葛藤し接面する人を「職人芸」（西, 2015, プロローグ p.ii）と揶揄する。我々はエヴィデンスベースな研究者の揶揄と対峙し、接面の方法を提示しなければならない。

社会支援や臨床心理の現場では、①気づきがあり、その気づきを②記述（言語化）する作業がある。次に、それを③共有する（西, 2015, プロローグ p.iii）。

エヴィデンスを想起する②エピソード記述（言語化）には

②-1 エピソードは エピソード名、背景、エピソード、考察、と切り分けて記述するとわかりやすい。

②-2 エピソードは以下の明証性を予期して描かなければならない。

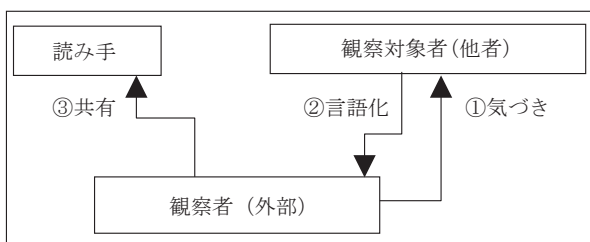


図1：接面の方法

- 私に実感されるものとしての明証性
- メタ意味の実感（現象学的還元）をする明証性
- 観察対象者（他者）にも了解可能と確信する時点での明証性
- 読み手にとっての明証性

というルールと明証性が求められる（鯨岡, 2015, pp.216-220）。

接面は対象者（他者）の力動感が自分の中にも立ち上がり（メタ意味）相手の心をとらえる基底となる作業である。接面により「目から鱗」「腑に落ちる」「納得」などの理解がすすむこともある。「目から鱗」とは気づきが発見として自己認識され記述（言語化）する瞬間である。「腑に落ちる」とは「語り手の言葉が、聴き手本人の体験や思いを触発することで、聴き手のなかに反省的エヴィデンス（確かに自分にも思い当たる）が生まれること」という感触（西, 2015, p.180）、深い了解である。それを対象者に投げ返し、気づき（自己了解）が促進される（西, 2015, プロローグ p.vi）。対象者のエピソードの力動感と自己の気づきとの往復運動（①⇄②）、言い換えれば間主観的にわかる、間身体的に響きあうことが一次的エヴィデンスである（西, 2015, プロローグ p.v）。そうした気づき、反省的エヴィデンスを通じて、「確かにこのようになっている」と対象者または読み手に確実性、不可疑性が確認された（西, 2015, p.130）とき「納得」と表現される。

反省は現象学における本質的な方法の一つ（木田他編, 1994, p.390）であり、現象学的分析は自分の経験を「反省」することによってなされ、「間主観性（相互主観性）のなかにある」反復的同一化総合として、構造を発見することである（木田他編, 1994, pp.227-228）。

ここでいう「反省」とは、日常用語の反省とは異なり、自己の経験、内面との照会であり、柳田國男の民俗学の方法である「内省」にあたる（岩本, 1990）が、引用のまま、以下「反省」と表現する。

3.2 一般価値・社会価値エヴィデンス

他者のエピソードは、私のなかの反省的エヴィデンスに支えられることによるのみ、本質（構造）観取をおこなうためのエヴィデンスとして機能する（西, 2015, p.164）。

体験反省的エヴィデンス＝接面パラダイムは、客観主義パラダイムではなく（西, 2015, プロローグ p.v）、「自由」「不安」「言語」「欲望」「感情」「身体」といった人間一般の価値に到達すると、了解性が高くなる（山竹, 2015, p.101）。また臨床心理学の社会支援の接面パラダイムでは、「命」「持続」「愛着」「生活」などが、有効な二次的エヴィデンスとして想定される。

実践政策学の防災や災害復興のエピソードでも、「命」「地域持続」「生活」に関わる社会一般価値に関わる接面こそが、公共的な二次エヴィデンスを想起させ、読み手の了解性を高めるのである。

3.3 フッサールの接面方法

この接面による構造の取り出し方法をフッサールは

1. 対象の「ありあり感」をとまなう⁽⁸⁾ (『イーデン I』 § 39)
2. 反省 (内省) することにより背面まで含めた「三次元立体」としての対象を知覚 (『イーデン I』 § 41)
3. 2. は予期される
4. まわりの背景も、地と図によって潜在的に把握されている (『イーデン I』 § 35)
5. 知覚された事物は客観的世界の一部であり、そこに居合わせれば誰でも同じものを見ることができ信憑が必ず伴う。(『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』 § 47)

と提議した。(西, 2015, p.138)

フッサールは反省的エヴィデンスにもとづくことによって、認識や価値についての体験世界の「共通な構図」を探究するための公共的な議論の空間を作り出そうとした。結果、体験世界の共通な構図がコミュニケーションされ、公共的な議論になる (西, 2005 ; 西, 2015, p.131)。反省的エヴィデンスは、各自の体験にあてはめて吟味することができる…記述は公共的に討論しうる次元をもつ (西, 2015, pp.138-139) と、西はいう。

3.4 エピソード記述の要素

以上の接面の方法を整理し、エピソード記述のポイントを以下に述べる。

- ① 発見、気づき (眼から鱗) の記述 (言語化)
- ② 対象の力動感が伝わるメタ認知 (納得、腑に落ちる)
- ③ 反省 (内省 = 自分の体験、感覚と対象者との対話を自分にひきもどして考え、それを記述する)
- ④ 社会的一般性 (「命」「持続」「リスク」「生活」など社会一般に関わる公共的な反省とする)
- ⑤ 背景、考察、エピソードに切り分けて記述する
- ⑥ ありあり感 (当事者性を背負った表現や方言) 構造発見、分析方法、記述法

次章では、この方法にもとづき、ありあり感のあるエピソード資料を抽出し、筆者の発見、反省 (内省) の結果としての公共性を記述し、観察者、対象者、読み手の納得を意図した記述を試みる。

4. エピソード分析

4.1 エピソード資料

本論ではエピソード記述の方法を検証する資料として、『聞書 水俣民衆史』(初版は1990年:岡本・松崎, 1997)と石牟礼道子『苦海浄土』(初版は1969年:石牟礼, 2004a)を使用する。

『聞書 水俣民衆史』全5巻は、1957年に東京大学法学部を卒業し新日本窒素肥料株式会社に入社し、水俣工場第一組合委員長として水俣病に社内に対峙 (反省) した

岡本達明らによって、水俣病の根源となった地域の近代化の民衆史を聞書で描いたものである。

『苦海浄土』は、水俣病の鎮魂の文学として第1回大宅壮一ノンフィクション賞を与えられたルポルタージュであり、事実の記録にとどまらない私小説、熊本弁による「ひとり語り」「浄瑠璃」といわれる (池澤, 2004, p.614)。

前者が熊本弁による聞書記述であり、後者が石牟礼道子しか語れない (再現性がない) 語りである。両者の聞書、または著者と話者が融合した語りは、

身体化した生活感覚を

熊本弁 (生活言語) のエピソードで満たされている。

両者は

読み手の生活感覚とのコミュニケーションを誘発し (3.4の④社会一般性)

憑依した (当事者性を背負う) 言葉 (3.4の⑥ありあり感)

満たされた優れたエピソード記述と考える。

以下、エピソードを紹介し、背景や反省、考察を付してみた。B-1、B-2は同対象に対する、異なる自分津による異なるエピソード記述である。

4.2 エピソードA: 沖縄寄留漁民

朝起きてみれば、あっちの女宿から青年共が起きてくる。こっちの男宿から女子共が起きてくる、ていうふうやったい。でも、舟津⁽⁹⁾には絶対に遊びにいかんじやったな (岡本・松崎, 1997, p.200)。

・ 地理的背景

船津は窒素工場に隣接し水俣川河口にある。今は市街地であるが大正12年の地図では、海に突き出して氏神八幡神社がある。有機水銀を排出した百間港とは異なる方向だが、一時、排水口となった。八幡 (船津) の

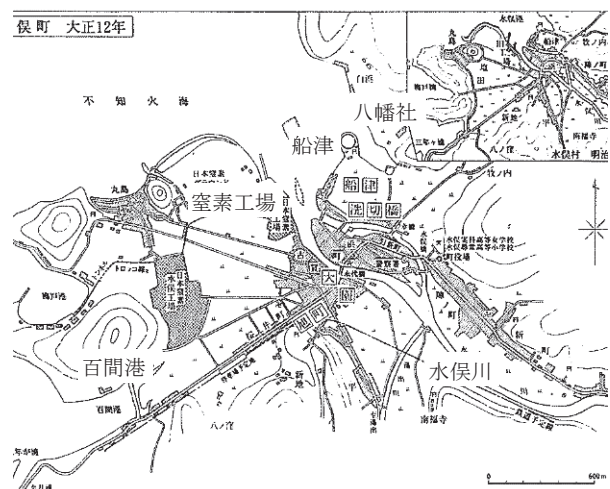


図2: 水俣町 (大正12年)

注: 『聞書水俣民衆史』第2巻, p.25 に加筆。

砂地につながれていた小舟が、陸にあこがれて、夜毎の夢の中で、長い舳先を伸ばしては、砂をなでつけているうちに、ある朝、家のようなものに変身していたとでもいおうか、坪谷の底部にある三軒の家は、手作りめいて、はれがましいような、眩しげなたたずまいをしていた（石牟礼，2004b，p.437）」と文学的に寄留漁民の立場を描くが、村の特定を避けている。（3.4の②文学的力動感ゆえに、厳しさを納得）

- 歴史的背景

坪谷に居ついた「漁師方と違って、運搬船を廻す、舟人」は、「天草者」といわれ差別された。エピソードで指摘された桶島は、上天草の離島である。沖縄寄留漁民とは異なる、天草寄留漁民（舟人）の定着場所が坪谷であった。

- 反省（内省）

エピソードは、

- (1) 「奇病」を出した舟人（漂流漁民）に対して、「会社ゆきの衆」の差別発言
- (2) 坪谷での定着
- (3) 「奇病」を出して追い詰められる舟人の生活という構成になっている。

(1) 水俣病の責任は、チッソ水俣工場と、対策が遅れた行政にある。しかし、巷間いわれる「チッソ・行政対水俣市民」の対立ではなく、チッソ・（会社行きを中核とする）水俣市民対（水俣病被害者を含む）舟人（漂流漁民）⁽¹³⁾であったことに気づかされた⁽¹⁴⁾。（3.4の①発見）

筆者は地域での怨嗟、差別に驚愕するが、なぐれ（舟人、寄留漁民）差別が水俣病に対する「奇病」意識と重なり、被害者を苦しめたことを思い知った。

(2) 坪谷での定着については、浜、河原などの無主の地における漂泊の職人・商人の自由な活動、市立てが想起される。大分県宇佐八幡和間浮殿は浜に臨時にできた「仮屋」で、茶屋、牛馬、唐物、酒屋の市がたった（森栗，2004，p.150）。浜や河原に住みついた漂泊民は、神社から市が認められることがあっても、住民からは河原者とよばれ差別される。坪谷の「舟人（寄留漁民）」も、台地の上に住む「会社行き」の妻女から「鳩の尻のすただれのごたるところに、這い上がって来た者のくせに」といわれた（石牟礼，2004b，p.474）。（3.4の③内省、⑥ありあり感）

(3) 舟人（寄留漁民）」はもともと、はれがましかった。「舟人はよかろなあ、綺麗づくめで。海の上は晴れ晴れして」（石牟礼，2004b，p.475）「浜の岩という岩には、濃い紫色をしたカラス貝が隙間なく繁殖し、それを食べる」「いかなる食い道楽の人も、王様ちいいなるですよ」「わしげあたりの海辺の者しか知らんじゃろうよ」とその生活を誇っていた。ところが「そのムラサキ貝に、いちばん水銀がたまつたちゅうは何事か」（石牟礼，2004b，pp.477-478）と、その誇りが裏切られたのである。

挙句「水俣病は、びんぼ漁師になる。つまりはその

日の米も食いきらん、栄養失調の者どもになる」（石牟礼，2004b，p.159）といわれ、発病者に栄養をつけさそうと、さらに貝を食べさせた。

自然を失うなかで、自然と暮らしてきた人びとが発病し、差別ゆえに追い詰められ、病人によかれとムラサキ貝を自ら食べさせた家族の深い絶望に筆者は「同情」する。（3.4の①差別のなかでの不幸の連鎖の発見、④命疎外）

- 考察

貧しいながらも綺麗づくめで晴れ晴れした海で暮らしてきた「舟人（寄留漁民）」が「会社行き」に差別され、差別された者が「工場」に命を奪われる。公害は一定の数値の水俣病認定患者だけの問題ではない。単なる企業犯罪、政府の責任忌避だけでもない。近代化における地域の分断、差別意識によって、地域全体で自然に一番近い「晴れ晴れした」人々を「奇病」に追い詰め、結果として地域社会を破壊した。

4.4 エピソードB-2：患者・口子【坪谷】（後藤，2013）

（個人名は□で筆者伏せ字）

百間排水口から南へ下って、国道三号線ぞいに二キロほど行くと、最初の集落に月浦がある。…このあたりの海岸は、石灰岩の土地が、高さを維持したまま海に落ち込み、海と陸とが衣の裾のひだのように幾重にも唱和して魚たちの隠れ家をつくっている。扶られたように陸地が崩落している空間に、海が誘い入れられて遊ぶ入江がある。入江の三方から崖地を取り囲んでいる。この集落が坪谷だ。これを、つぼだん、と発音している。壺の底のように、坪数で数えられるほどにひどく狭い。

入江を囲む崖地には、積み重なるように人々の住い家がより添っている。その一軒に□の家がある。この家では、父の□、母の□が水俣病で殆ど動くこともできず、五女の□子は一九五六（昭和三一）年四月に発病し、翌月には死亡している。五男の□は同じ年の小学四年に発病し、話すことも、聴くことも、視ることも、おぼつかなくなっている。六男の□は、やはり同じ年、小学二年に発病し、ほとんど魂が抜けたように無気力で話すこともままならず、なんの仕事にも就けなくなっている。…

祖父や父たちが、孫や妻や子たちのためにと、一家団欒の夕餉のテーブルに盛り並べた魚や貝たちのなかに、メチル水銀の毒が潜みこんでいることなど、誰が知りえよう。

B-2のエピソード記述は、B-1と同じ被害者、地域を対象としている。B-2は場所を特定し、貧困と個人の発病被害を告発的に記述しているが背景の記述が弱い。背景の歴史や生活よりも「告発」という答えが先に出ているので、「海が誘い入れられて遊ぶ入江」などという文学的な記述も試みてはいるが、読み手は告発のエピソードを受け止める（学習する）だけで、イメージを膨らませたり、自己の経験を参照し反省（3.4の③）することが難しい。ゆえに追記も含めた切り分け記述（読者の深い読み込み、分析記述）ができない。したがって発見がない（3.4の①）。

加えて、B-2のエピソードは方言を使わない第三者的レポートであり、シリアスな場面を描いているわりには(3.4の⑥ありあり感)が不足している。

5. おわりに

第4章では、ありあり感のあるエピソード記述を提示し、分析者の発見、「命、生活、持続」などの社会一般価値にとどくような反省(内省)を記述し、「エピソード名、エピソード、背景、反省(内省)、考察」に切り分けた記述を試みた(A、B-1)。これを一覧に示した(表1)。

結果として、A『開書 水俣民衆史』やB-1『苦海浄土』は、内省を誘発し、きりわけて記述できたが、B-2『患者・□子』では、告発を読むことはできても、読み手の反省を促すことができず、切り分け加筆もできなかった。A『開書 水俣民衆史』やB-1『苦海浄土』に、筆者が加筆したエピソード記述は、

- 水俣病における、寄留漁民・沖縄差別
- 水近代工場の展開による地域分断

を明証性をもって示すことができたと考える。

無論、この内省で充分とはいえないが、今後はこうした反省的エピソード記述方法を参考に、①発見、②納得・力動感、③反省、④社会一般性、⑤切り分け記述、⑥ありあり感などを考慮した、了解性の高い多様なエピソード記述がすすみ、経験の構造やその公共的側面に留意した、実践政策研究が展開されることが期待される。

注

- (1) 社会を複合体と捉える考え方は、フランス地理学にはやくからあり、衛生や景観を扱った(松田信(1971). 地理的複合体概念の展開. 人文地理 23-1.p.p.74-90). 近年では、環境社会学で、複合体概念を使っている(盛岡通(1999). 循環複合体の研究. 土木学会誌 12, p.p.44-46).
- (2) 間世界(intermonde)とは、我々の住む世界を何かと何かの〈あいだ〉の関係性として捉えようとするメルロ＝ポンティの世界観である(清水淳志「メルロ＝ポンティにおける世界の諸位相」『慶應義塾大学大学院 積迦医学研究科紀要』No.66, 2008年, 28-29頁)。
- (3) 『ホモサピエンス全史』(ユヴァル・ノア・ハラリ(2016), 河出書房新社)によれば、資本主義のフィクションが人々を幸福にしないなか、欲望にとらわれない共同のフィクションが求められている。ボランティア経済もそのひとつかもしれない。

- (4) ただし、当時の神学の唯心論を打破するため、厳しく数学的明証性を求めていた。
- (5) 2.3に後述するように、本質という表現は誤解を与えやすい。本論では、本質とは表現せず、比較的近い言葉としてフッサールが語った、構造または一般構造と表現する。引用の場合は、本質(構造)と付記した。
- (6) 現象学的還元(木田他編, 1994, pp.125-128)である。
- (7) 会議録のテープ起こし記述では、「要するに」「エー」などの主題でない単語数が最も多いことがあり。定量なら発言の主題は「要するに」となる。報告会議事録では、事業実施できなかった担当者ほど、言い訳の発言が長くなる。会議録記述の発言の長さとのエヴィデンスには、論理的因果はない。
- (8) *Leibhaftigkeit* と表記される。
- (9) 市史等文献上は「船津」である。
- (10) 熊本県における水俣病認定患者分布図(熊本県作成, H8,12,26 処分現在)によれば、認定患者1774名のうち、2番目に多いのが、エピソードBの坪谷が所属する月浦地区178名である。水俣市内各地39地区では排出口のあった百間が50名と市内2番目に多いが、八幡(船津)は4番目に多い。
- (11) 江戸時代、琉球王国は薩摩藩の支配を受け、それを正当化するため日琉同祖が喧伝された。
- (12) 原典には個人名が掲載されているが、不必要に個人名を掲載するのを避けるため、ここでは伏字とした。
- (13) 「奇病ちや漁師もんが多かったい(奇病といえば漁師が多い)。大体漁師ち言えばなぐれ(流れ)でよそもんやろが!。(大体漁師といえばなぐれでよそ者だろ!)」「湯堂、茂堂、月浦、丸島、舟津、みんな貧乏人のなぐれの漁師風情でしょつが。あつだどもは(あいつらは)、弱った魚をどしこ(たくさん)食べて奇病になりよつた、これは事実ですじゃ。」(大塚勝海「水俣における地域経済再生への取り組み」<http://kgi.tokyo.jp/fur/ootuka.html>, 初出出典不明)
- (14) 戦後の窒素工場の再開を指揮した橋本彦七元工場長は、戦後第一回の市長となり4期、市長をつとめた。

引用文献

- デカルト, R. (1997). 方法序説. 岩波書店.
- デカルト, R. (1974). 野田訳. 精神指導の規則. 岩波書店.
- フリードマン, M.・フリードマン, R. (1983). 西山訳. 選択の自由(上・下). 講談社.
- 後藤孝典(2013). ドキュメント水俣病事件1873-1995. <http://toranomom.cocolog-nifty.com/minamatabyojiken/2013/02/post-c8fc.html>.

表1: エピソード記述の方法一覧

	①発見	②納得・力動感	③反省	④社会一般性	⑤切り分け記述	⑥ありあり感
A 沖縄寄留漁民	○		○		○	○
B-1 寄留漁民と水俣病	○	○	○	○	○	○
B-2 患者・□子						

- 池澤夏樹(2004). 解説 石牟礼道子全集・不知火 第2巻. 藤原書店.
- 石牟礼道子(2004a). 天の魚 石牟礼道子全集・不知火 第3巻. 藤原書店.
- 石牟礼道子(2004b). 天の魚 石牟礼道子全集・不知火 第2巻. 藤原書店.
- 岩本通弥(1990). 柳田国男の「方法」について—綜観・内省・了解—. 国立歴史民俗博物館研究報告, No. 27, 113-135.
- 金子郁容、松岡正剛、下河辺淳(1998). ボランティア—経済の誕生. 実業の日本社.
- 加藤久子(2012). 海の狩人 沖縄漁民—糸満ウミンチュの歴史と生活誌—. 現代書館.
- 木田元・村田純一・野家啓一・鷲田清一(編集)(1994). 現象学事典. 弘文堂.
- 木下康仁(1999). グランデッド・セオリー・アプローチ. 弘文堂.
- 小林隆児(2015). 精神療法におけるエヴィデンスとは何か. 小林、西編. 人間科学におけるエヴィデンスとは何か. 新曜社.
- 鯨岡峻(2005). エピソード記述入門. 東京大学出版会.
- 鯨岡峻(2015). 「接面」からみた人間諸科学. 小林・西編. 人間科学におけるエヴィデンスとは何か. 新曜社.
- メドウズ・ドネラ, H. (1972). 成長の限界—ローマ・クラブ「人類の危機」レポート—. ダイアモンド社.
- 水俣市史編纂委員会(1966). 熊本県神社明細帳. 水俣市史.
- 森栗茂一(1983). 伝播技術独占の結果としての伝承. 日本民俗学, No. 154, 91-105.
- 森栗茂一(1984). 南西諸島鍛冶職の伝播と定着. 季刊人類学 15-3, 71-113.
- 森栗茂一(1995). 夜這いと近代買春. 明石書店.
- 森栗茂一(2004). 河原町の歴史と都市民俗学. 明石書店.
- 西研(2005). 哲学的思考—フッサール現象学の核心. ちくま書房.
- 西研(2015). プロローグ. 小林・西編. 人間科学におけるエヴィデンスとは何か. 新曜社.
- 岡本達明・松崎次夫(1997). 聞書 水俣民衆史 第1巻 明治の村. 草風社.
- 竹田青嗣(2012). 超解説! はじめてのフッサール. 現象学の理念. 講談社.
- 竹田青嗣(2015). 人文科学の本質的展開. 小林・西編. 人間科学におけるエヴィデンスとは何か. 新曜社.
- 立平進(2002). 海を旅する人たち—沖縄・糸満漁師の軌跡—. 長崎国際大学論叢, No. 2, 91-99.
- 辻田真佐憲(2016). 「マスゴミ批判」がこの国にとって「百害あって一利なし」である理由. 週刊現代. 2016/12/19. <http://gendai.ismedia.jp/articles/-/50470>.
- 山納洋(2016). つながるカフェ. 学芸出版.
- 山竹伸二(2015). 質的研究における現象学の可能性. 小林・西編. 人間科学におけるエヴィデンスとは何か. 新曜社.

Abstract

This paper proposed a hypothesis about a method of narrative description in regional research and practical policy studies. Descriptive expression and analytical description as follows were presented with the real descriptive materials of victims of Minamata disease. (1) Descriptions were sorted by episodes, the backgrounds of geography, history, and ethnography, and discussion. (2) In discussion, analysts' reflections and discoveries, including their attitudinal changes, were described. (3) The discussion focused on life, vitality and sustainability. (4) The discussion was described with the expectation to obtain agreement and attitudinal change of readers. The result suggested that the discrimination against bleaching fishermen in the area delayed the relief of victims of Minamata disease, and the regional division due to the appearance of modern factories was an underlying cause of Minamata disease. This method could be a qualitative analysis in regional research and practical policy studies.

(受稿: 2017年5月16日 受理: 2017年7月10日)